

自由応募分科会3 「中国革命と地域社会における権力構造の変遷：「土地革命」神話を超えて」
報告2

陳耀煌（中央研究院近代史研究所）

「伝統から現代へ：20世紀中国基層農村リーダーの性格の変化」

本報告では、1940年代に華北地区でおこなわれた《中国農村慣性調査》と三谷孝、魏宏運らが1980、1990年代におこなった《華北農村調査の記録》を用いて20世紀中国基層農村リーダーの性格の変化を検討しなおす。

Prasenjit Duara は、《中国農村慣性調査》を用いて中国基層農村リーダーの性格を検討したことがある。彼によれば、国家現代化の建設に伴って、国家権力が農村社会に一段と浸透し、郷紳が国家からの様々な要求から逃れるために公職に就くのを拒んだことにより、素性怪しい者がその隙に乗じて新しい農村のリーダーとなった。彼等は、国家権力を後ろ盾として、村民を搾取し、営利に汲々としている国家のブローカーとなった。これにより、結局国家権力が農村に一段と浸透するにつれて人心が益々国家から離れるという現象がみられた。これが Duara がいうところの「state involution」である。

筆者は、Prasenjit Duara の見解を支持しない。本報告では、20世紀中国基層農村のリーダーが単なる国家のブローカーではない点を明らかにする。時代の推移と共に基層農村のリーダーに求められる能力は変わっていった。清朝末年の農村リーダーは、専ら村内の仕事に従事し、国家権力に対応する必要があまりなかった。したがって、その頃の農村リーダーは、土地と金を持っていることによって村民から尊ばれた。

民国以降、国家からリーダーに委ねられる任務が一層重くなった。それ故に、基層農村のリーダーは、土地を所有している以外に、各方面の政治団体への対応能力も兼ね備えなければならなくなった。1949年の後中国共産党は階級闘争の旗を掲げ、糧食の生産を強調したため、土地と富より、身分と労働能力の方が基層農村のリーダーになれる必要条件となった。土地と富は却ってリーダーの重荷になってしまった。1965年の四清運動ならびに文化大革命の勃発によって、労働経験が浅いながらも文化水準が高かった若い幹部たちは、政治闘争を利用して、新世代の基層農村のリーダーとなった。1970年代以来、文化大革命の熱が下がると共に、労働経験に富む老いた幹部たちが、基層農村のリーダーに返り咲いた。1980年代以降の改革・開放のもとでは、基層農村のリーダーが村民に儲けさせるかどうかになりよりも一番重要なこととなった。

以上のような形で、時代が進むに伴って、中国基層農村リーダーの性格も変わり続けていった。